

社会調査家・石田忠（1916.2.3～2011.1.25） のかたわらで

濱谷 正晴

一橋大学名誉教授

1. 自分が取っ組むことに意味がある問題を発見したら…

《私の先生、山中篤太郎先生は僕に、何でもいい、自分が打ち込めるテーマについてしっかり勉強して欲しい。怠けたらすぐにやめてもらう。何をやれ、何をやらなきゃいけないということにこだわる必要はない。自分が問題を感じる、それと取っ組むことに意味がある、そういう問題を発見したら、その問題と必死に取り組んでほしい。こと、その問題に関しては、学者としての良心に恥じない努力をやってくればいい、と。》

このエピソードは、1997年7月19日の「石田忠先生を囲む会」（佐野書院）において、ゼミナールの卒業生を前に語られたものである。この日の演題は「被爆者と私」。“なぜ、それほどまでに、被爆者問題に懸命になっているか、を説明するくだりの中であった。

本稿を書くため、資料調べをしている最中、あることに気づいた。

山中篤太郎「上田貞次郎先生——一つの評伝—— 『一橋論叢』1965年4月号

石田 忠「山中篤太郎先生——一つの伝統について—— 『一橋論叢』1966年3月号

ほぼ同じ時期、まるで示し合わせたかのように、山中先生は恩師上田貞次郎先生が（急性盲腸炎のため）「逝って満25年の祈念の日をむかえる」にあたり「評伝」を著し、その山中先生の退官記念号の冒頭論文で、石田先生は、上田貞次郎（1879.3.19～1940.5.8）から山中篤太郎（1901.9.4～1981.1.16）へとつながる「伝統」について考究していたのである。

《大正中期以降の先生の学問に明白に現れだしたように、「現実」の日本経済の中に立って社会経済的な「問題」をとり出し、これを「考える」ところに先生の研究が方向づけられている。この「現実的」「問題意識的」「考え方」は、日本資本主義の成長そのものが提出する問題を前にして、人間のための経済、人間からみて人間に帰る経済という社会観の動きの表現であり、その動きは、さきの自由人の社会への愛着、尊重をその底にひそめている。後の段階の新しい問題への一つ一つの追跡がこれを説明している…。》

「一つの評伝」においてこう述べた恩師について、石田先生は、《山中先生は恩師の学問の中になおいゆる「輸入観察主義」がなお払拭されずに残っていると指摘することによって、上田先生の「現実的・問題意識的・考え方」に徹するところに自分の研究を方向づけようとされた。その現在形においてではなく、その未来形において恩師の学風を継承しようと



したところに山中先生の立場がある》とし、このことを踏まえて、「『一橋』における一つの伝統の形成である」と指摘した。

《中小工業を正しくとらえる方法は『中小工業を見る者の自由な立場』の中にあるのではなく、『見らるる対象たる中小工業それ自体の中に自存する「立場」の要請』たる如きものでなければならない。しかしこのような方法はいかにして可能なのであろうか。／このことこそは、そのながい学究生活をつらぬいて、山中先生がたえず自らに問いつづけられた課題であったのではないであろうか。》《日本の社会のうごきを見つめながら、何が本当の問題であるかをしっかり掴まえようとする態度は、社会改革へのやみがたい情熱に発するものにほかならなかった》と。

こう記したとき、石田先生自身、「自分が問題を感じず、それと取り組むことに意味がある問題」に出遭いかけていた。

《私の福田さんとの出会いは一人の社会調査家としてのそれであった。昭和 42 年の 12 月のことである。》《〈原爆〉とは人間にとって何であるのか、そして人間は〈原爆〉に対していかなる態度をとるべきであるのか。これは単なる学問的好奇心といったものではない。たとえ他のすべての人々にとってそうであるとしても、それですますわけにいかないのが被爆者である。何らかの形で〈原爆〉像をつくりあげ、それに対して己れのありようを定める——これはあらゆる被爆者にとって避けることのできない課題であろう。》（「原爆体験の思想化について—福田須磨子さんのこと」1974 年）

《およそ経験的研究においては、何が本当の問題であるかを明らかにすることが大切…それによってのみ調査研究の方向がきまってくるからである》《しかし、問題の定式化は先験的に可能なことではない。一体それはどこで探求されねばならないのだろうか。》（「社会調査家の立場」1970 年）

恩師が直面した「課題」と「態度」は、社会調査家・石田忠のそれでもあった。

「一つの伝統」論文は、「学恩に報いること乏しき一門下生がそのことを祈念して、先生の学問に接近しようとした試みの一つにほかならない」と結ばれている。「そのこと」とは、先生の学風が《一つの伝統として、ながくわが大学に継承され展開されつづけていく》ことを指すが、それは、「自らの学問をおく立場への反省をきびしく》することなしにかなわぬことであった。

2. 『社会調査家 石忠さん』

さて、社会調査家・石田忠の「評伝」が、2016 年 7 月、廣澤昌といううってつけの書き手を得て実現した。

石田忠ゼミナール卒業生の会は、「沓石会」という。〈沓石〉とは「伽藍の柱を支える基礎の石」のことである。世話人会は、先生の生誕 100 年（1916 年 2 月 3 日生）を期して、恩師の「評伝」をつくることとし、廣澤昌氏（1968 年卒）に執筆を依頼した。廣澤さんは、



同期の谷川達夫さんとともに、長崎でのゼミ調査（被爆者の生活史調査）をリードした方である。卒論のタイトルは『被爆体験の思想化』。石田先生が福田須磨子さんと出遭う初めての場に居合わせた。卒業後、サントリーのコピーライターとなり、『新しきこと面白きことーサントリー・佐治敬三伝』（文藝春秋、2006年）をものしていた。

評伝『社会調査家 石忠さん』は私家版・非売品。学生は先生のことを親しみの念をこめて「石忠さん」と呼んだ。沓石会員と歴代の社会調査室助手、〈原爆と人間〉研究会、はまゆう会（濱谷ゼミ卒業生）有志のほか、ご遺族、先生とゆかりのあった被爆者、研究者、MSW などの方々にお分けしたものである。『評伝』本文の構成は以下のようである。

第1章 一橋大学と石忠さん

- | | |
|-------------------|-----------------|
| § 1 一橋リベラリズム | § 2 暗い谷間の時代に抗して |
| § 3 卒論「社会政策の理論構想」 | § 4 戦争の体験 |
| § 5 貧困研究とブース | § 6 石田ゼミナール |

第2章 社会調査家として

- | | |
|------------------------|----------------|
| § 1 被爆者との出会い | § 2 〈立場〉と想像力 |
| § 3 反原爆の〈立場〉 | § 4 生活史調査票の成立 |
| § 5 1985年 | § 6 原爆死をどう考えるか |
| § 7 「石田忠統計集〈原爆体験の思想化〉」 | |

第3章 誰か故郷を思はざる

- | | |
|-----------|----------------|
| § 1 生い立ち | § 2 「ドマーニ神戸」にて |
| § 3 跳ぶのです | |

最初の草稿を拝読して驚いたのは、先生にまつわる出来事や作品、エピソードが、廣澤さんが卒業後もずっと先生のそばに居合わせたかのように、描かれていたことである。細かい事実関係や前後関係、ターム等の理解にとりちがいがなかったわけではないが、廣澤さんには、石忠さんのあゆみを組み立てていく明確な枠組みができていたのである。

廣澤さんのひらめきに呼応して、一橋大学学園史資料室には僕も同行した。石忠さんが生まれ育った故郷＝島根県邑知郡吾郷村大字奥山をたずねて、廣澤さんはフィールドワークを敢行した。

原稿の読みあわせには栗原淑江さんにも加わってもらい、つきあわせをくりかえしながら、廣澤さんの執筆が進んでいった。栗原さんは、石田ゼミ紅一点の卒業生。社会調査室助手ー日本被団協事務局をへて、「自分史つうしんヒバクシャ」を20年（1993.2～2013.1）にわたり主宰。現在、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の活動・アーカイブの構築にたずさわっている。

冒頭に触れた「先生を囲む会」で、石忠さんはこう述懐する。

《今日もこれから若干の統計にもとづいて話をするわけですけども、私は、一枚の統計表を前にして、そいつを見て、感じ始めると、半日、一枚の統計表を見ていても、飽き



ないんです。》

こんな姿は、私が学生・院生時代、ついぞ見かけることはなかった。かつて、創立 100 年記念『一橋大学学問史』において「社会調査」の項を担当することになり、石忠さんの調査研究過程——「貧困調査」→「イギリス社会調査史論」→「原爆被害者の生活史調査」——を辿ったことがある。こうした作業をやってはじめて、長崎での被爆者調査に携わる以前の石忠さんのあゆみ（一端）をうかがい知ることができた。

統計家としての片鱗を私たちに垣間見せたのは、1977 年の NGO 被爆問題国際シンポジウムに際し実施された「被爆者生活史調査」の報告書＝MSW を中心とする生活史調査員が全国で手掛けた 100 人の聞き取り調査の「予備的考察」においてである。そうして 1985 年、被爆 40 年に日本原水爆被害者団体協議会が全国で実施した「原爆被害者調査」による大量観察データ（13,168 票）の分析を通じて、統計家・石田忠の本領が発揮されていった。

「〈原爆〉のもった最大の意味は、それが原爆否定の思想を生み出したというところに在る。この思想形成の必然は被爆者の〈生〉そのものの中に在る。」

被爆者がたどった生活史・精神史を事例分析するなかから到達したこの命題を、統計的に検証する機会が、「原爆被害者調査」データでめぐって来た。「あの日の地獄」を綴った「ことば（自由記述）」をよみとき、それを検証することのできる指標を調査データから探り出し、つながり具合を確かめながら、「総括表」へと到達する。

社会調査家・石田忠にとってこの「総括表」は、「冷厳なる事実のもつ論理が自らそこに見えるように浮かび上がってくることのできるような『統計の枠組み』（「チャールズ・ブースのロンドン調査について」1959 年）を構築したい、という積年の夢を実現したのもであった。

廣澤さんは、《学問的に未踏な処女地を切り開くために、人間を探求する社会調査家として飛躍・転生していく…苦闘の日々》を追った。

《問題の渦中にある人だけが問題の人間的な意味を知っているというのが先生の信念であり、したがって方法なのでした。そこで仮説を立て、調査票を作り、調査し、集計分析し、これをもとに仮説を立て直し、より意味のある調査票を作って再調査し、集計分析し、こうして粗い近似値の精度を次第に高めていきました。しかも最終的に先生がめざしていたものは、現実を「統計表」にまとめ、その統計表をして「原爆体験の思想化」を語らしめるというものでした。》《一つの調査を行うということに 30 年もの歳月を費やさなくてはならない。それほど問題の底は深く、大袈裟に言えば従来の人類の全思想を洗いなおす作業だった——何しろ事は人類そのものが消滅する緊急事態にかかわっていて、それへの根本的な対処法をいまだ、私達人間は見出していないのだから。》

「米寿を祝う会」（2004. 11. 14、佐野書院）記念資料の一つとして、『統計集〈原爆体験の思想化〉について』と題する冊子が配布された。これには、『統計集』から選び抜かれた 44 枚の統計表と、社会調査室における講義録（2004. 5. 23、88 歳のとき）が収録されてい



た。これを読み解いた感動を、廣澤さんはつぎのように綴っている。

《あなたが調べた数字たちのどの一つからも、まずは被爆者たちの血の叫び、魂のうめきが聴こえてきます。まさに「苦しんでいるのは被爆者ではありません。苦しんでいるのは人間です」というメッセージです。あなたの統計表から我々は、原爆がくりひろげた地獄図…そしてこれからもつづくであろう苦悩の地獄図、ヒロシマ・ナガサキの原爆地獄の全体像を読み取ることができます。しかも、嬉しくも心強いことに、これに押し流されまいとして、〈抵抗〉への〈飛躍〉を遂げ、雄々しくあかるく生きる被爆者が実にたくさんいることを、数字たちは物語ってくれています》、と。

石忠さんが紡ぎ出した統計表は 1551 表に及んだ。石忠さんから注文があると沼崎保宏さん（元職員）が一手に集計をひきうけ、整表は有富由紀さん（社会調査室助手）が担った。奥田妙子さん（元職員）は「あの日の証言」のアフター・コーディングに当たった。『石田忠統計集〈原爆体験の思想化〉』全 8 巻は、一橋大学に《〈原爆と人間〉研究会》があっはじめて可能になった仕事》であった。

3. すべて被爆者から学んだこと

“いまやらねば、いつできる。わしがやらねば、たれがやる。” そう意を決して、『評伝』を書き上げて下さった廣澤さん。“他に誰がやる”。僕にしかできない課題は、私たちに、原爆とは何であるか、を語ってくれた被爆者たちのことを、後世にのこすことだ。

一般に、社会調査やフィールドワークによって集められた一次資料の多くは、担当者の異動・退職・死亡等にともない散逸する運命にある。けれども、私たちが調査収集してきた資料とは、「核戦争」との遭遇を余儀なくされた人びとが、語り・書き記してくれた、「人類史的遺産」ともいいうる貴重な「証言」であり、そのような証言資料を研究業績や調査報告書のかげに埋もれさせておくわけにはいかない。

“わたくしは被爆者ではありません。わたくしがとりあげるあらゆる事実、あらゆる論理はすべて、たくさん証言や手記などを通して、わたくしが被爆者から学んだものにほかなりません” 石忠さんがいつもこう語ったように、私たちの調査研究を育み導いた証言そのものを、後世の人びとが活用できるデータベースとして残しておかなければ……。これをライフワークに、定年後、《原爆体験調査資料データベース & アーカイブ「原爆と人間」》の構築にとりくんできた。

この間（1965 年～）、私たちが関わった被爆者調査を列举すれば、つぎのようである。

- ①厚生省「昭和 40 年度原子爆弾被爆者実態調査」特別調査・事例調査（長崎）
- ②長崎原爆病院の長期入院患者調査（1966～1974：→石田忠編『反原爆』調査）
- ③長崎の被爆者運動・原水禁運動調査（1966～68、70）
- ④（長崎）生活見舞金受給者調査（1968）
- ⑤（長崎）被爆者特別措置法の効果測定調査（特別手当受給者）（1969）
- ⑥『もういやだ』第二集（長崎原爆青年乙女の会）寄稿者調査（1971）



- ⑦東京都在住被爆者調査 (1971) *山手茂先生のご依頼
- ⑧厚生省「昭和 50 年度原子爆弾被爆者実態調査」事例調査 (長崎市の部)
- ⑨岩手・静岡の被爆者運動調査 (1976)
- ⑩1977NGO 被爆問題国際シンポジウム「一般調査」 &同・補充調査 (1978)
- ⑪1977NGO 被爆問題国際シンポジウム「生活史調査」 &同・補充調査 (1978)
- ⑫『神奈川 被爆者 30 年のあゆみ 第一集』(神奈川県原爆被災者の会) 寄稿者調査 (1979)
- ⑬長崎原爆青年乙女の会 会員調査 (1980～ 現在)
- ⑭新潟県三条市在住被爆者調査 (1981) *社会学部の特定研究の一環
- ⑮原爆死没者・遺族調査 (日本被団協、東友会) データの集計
- ⑯日本原水爆被害者団体協議会「被爆 40 年 原爆被害者調査」(1985)
- ⑰山友会 (山里国民学校被爆当時六年生) 会員調査 (1991&2006～07、現在)

このうち多くは(⑩および⑮、⑯を除き)生活史・精神史の聴き取り調査である。私たちの調査は長崎で始まり主に長崎で継続されてきたが、被爆者運動のフィールドワークのなかから次第に、被爆地以外に在住する被爆者にもひろがり、⑩および⑯の大規模調査にかかわったことで、延べ2万数千人におよぶ全国の被爆者の調査資料が(保管を含めて)社会調査室に集積されることになった。

聴き取り。その多くは1回きりではなく、くりかえし継続調査する形を用いており(多い人で10回を超える方も)、録音およびトランスクリプトとなって残されている。

被爆者を調査する。それには、事前準備の過程で作成される資料、事後における整理・集計・分析資料はもとより、フィールドワーク(調査地および運動やイベントなど)の記録、文献、不定形資料の収集も付随する。恩師から、先輩・後輩・学生から、そして被爆者から託された膨大な資料を前に、ときに私は立ちすくみ、証言の重さに打ちのめされ、原爆に抗って生きる人間のたたかいに励まされている。

4. 〈原爆と人間〉

被爆から 20 年。厚生省(当時)が初めて実施した被爆者の実態調査には、石田忠のほか、隅谷三喜男、中鉢正美という 3 人の社会学者が参画した。ときを隔てること 40 数年、中鉢先生の「原爆関係資料」が「慶應義塾図書館の地下奥深くの倉庫に眠っている」ことが「被爆者調査史研究会」の手で発掘された。同研究会の成果『被爆者調査を読む』(有末賢・浜日出夫・竹村英樹編、慶應義塾大学出版会、2013 年)が刊行されて、①中鉢先生と石田先生の教え子・孫世代が、大学の枠をこえて出会い・交流する場(ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会主催の学習会)が生まれ、また②有末・浜・栗原・濱谷が呼びかけて、被爆者をまじえ、高山真さん(慶應)、根本雅也さん(一橋)、深谷直弘さん(法政)それぞれの博士論文の公开发表会を開いたところ、3 度とも大きな反響を呼んだ。③松



尾浩一郎さんには、一橋に残っていた故湯崎稔氏の「爆心地復元調査」に関するインタビュー（聞き手は廣澤昌さん）の音声を提供。④被爆者の体験を聴き取り絵に表現する、広島市基町高校の高校生たちの活動が脚光を浴びるきっかけを作ったのも、小倉康嗣さんの章であった。

ここ数年、活性化した広島・長崎の原爆に関する調査研究。それぞれの研究の位置づけをさぐる、先行研究に対する評価のなかで、石田忠（あるいは一橋大グループ）の被爆者調査のこともいろいろと言及されるようになった。そうした評価・批判等を念頭に置きながら、〈原爆と人間〉という視座について若干の整理をしておくことにしよう。

○原爆被害を解明する、あるいは、原爆体験の全体像を構築する：このことへの関心が薄れているようだ。最近では、①何を語ったかより、いかに語ったか、が重視され、②「語り手の声」や「リアリティ」が背後に退く傾向があるといわれる。「被爆体験に非被爆者がいかに関わっていくか」。そうしたアプローチで自己の対象化をとげた研究者ならではの、「被爆体験そのものの解明・構築」に期待したい。

○若手研究者には、〈モデル化〉、あるいは〈被爆者（運動）との一体化〉が引っ掛かるようだ。〈漂流〉と〈抵抗〉というタームに違和感を覚える人もある。「被爆者を理解しようと思うならば、常に人間を否定する力としてのみ働く原爆と、それに抗って生きていこうとする人間と、そのつばぜり合いとしてとらえなくてはなりません。」石田忠が到達したこの見地に立ち返りながら、一連の著作をもういちど読み解いてみてほしい。

○「被爆地」という場に囚われず、原爆という極限状況の下におかれた〈人間〉をみつめる。被爆者の運動は、「被爆地」を（から）見ているだけでは、わからない。どこ（全国すべての都道府県および海外）に暮らしていようと、被爆者として生きている。継承（活動）も、「被爆地」を離れた場所において試され追求されていってこそ、広がり生まれる。

○石田忠は、「原爆体験が被爆者の思想的営為をうながし、それに方向性を与える」ことを解き明かした。これを「被爆者であること」と「ある理念を信奉すること」との関係におきかえることはできない。

○私たちは、「記憶」ではなく、「苦悩」としてとらえる。被爆者はいまなお原爆に苦しんでいる。その苦しみは償われないまま、戦争を起こした国家によって「受忍」さえ強いられている。「苦悩を生きる人を理解することは無理である」という人もいる。社会調査家・石田忠の営みは、そうは言えないことの証しである。被爆者の苦悩から離れまいとする態度だけが、人間の視点を保証する。

《方法が問題を決定するのではなく、問題が方法を決定する》。石田忠が言い続けてきたこの方法的立場は、冒頭で紹介したように、上田貞次郎―山中篤太郎の学問のなかに胚胎していたものでもあった。

石田忠さんは、「社会調査家」たらんと、「社会調査家 social investigator」として生きることを糧に、95年弱の生涯を遂げた。



結びにかえて

《原爆問題な～。作業途中でやめてしまったが・・・浜谷君本を書いた。／自分は意見が違うから（どう違うかは触れず）。／自分も一冊書かなくちゃ・・・。》

拙著『原爆体験：6744 人・死と生の証言』（2005 年、岩波書店）について石田先生が、このような感想をゼミ一期生の大石倉平さんに漏らされていた。廣澤さんの原稿を読んで知った。岩波の『原爆体験』は当初共著として企画されたものであった。先生は、僕に向かっては黙して何も語らなかった。先生の眼には、《他日、完成させてもらいたい》と托した期待に応えたものとは映らなかったのであろう。

石田統計集のもとになった日本被団協の「1985 原爆被害者調査票」について、石忠さんは「囲む会」で、《被爆者団体が行ったといっても、その企画・立案は濱谷君がやった》と紹介して下さったことがある。調査票づくりは実際、被爆者との往復運動、いくどものパイロット・サーヴェイ、「積極的に問題を明らかにしていこうとする」被爆者の意思にうながされるようにして進んだ（拙稿「原爆被害者調査」の立場と構想—調査過程研究の一つのこころみ」1989 年、に詳述）。

そうしてできあがった調査票＝設問構成と選択肢（群）が、〈原爆体験の思想化〉に関する統計分析が可能となるデータを提供できたこと、というより、そういう可能性を石田先生が調査票よりくみとり・ひきだして下さったことに感謝を込めて、本稿を閉じることとしたい。

